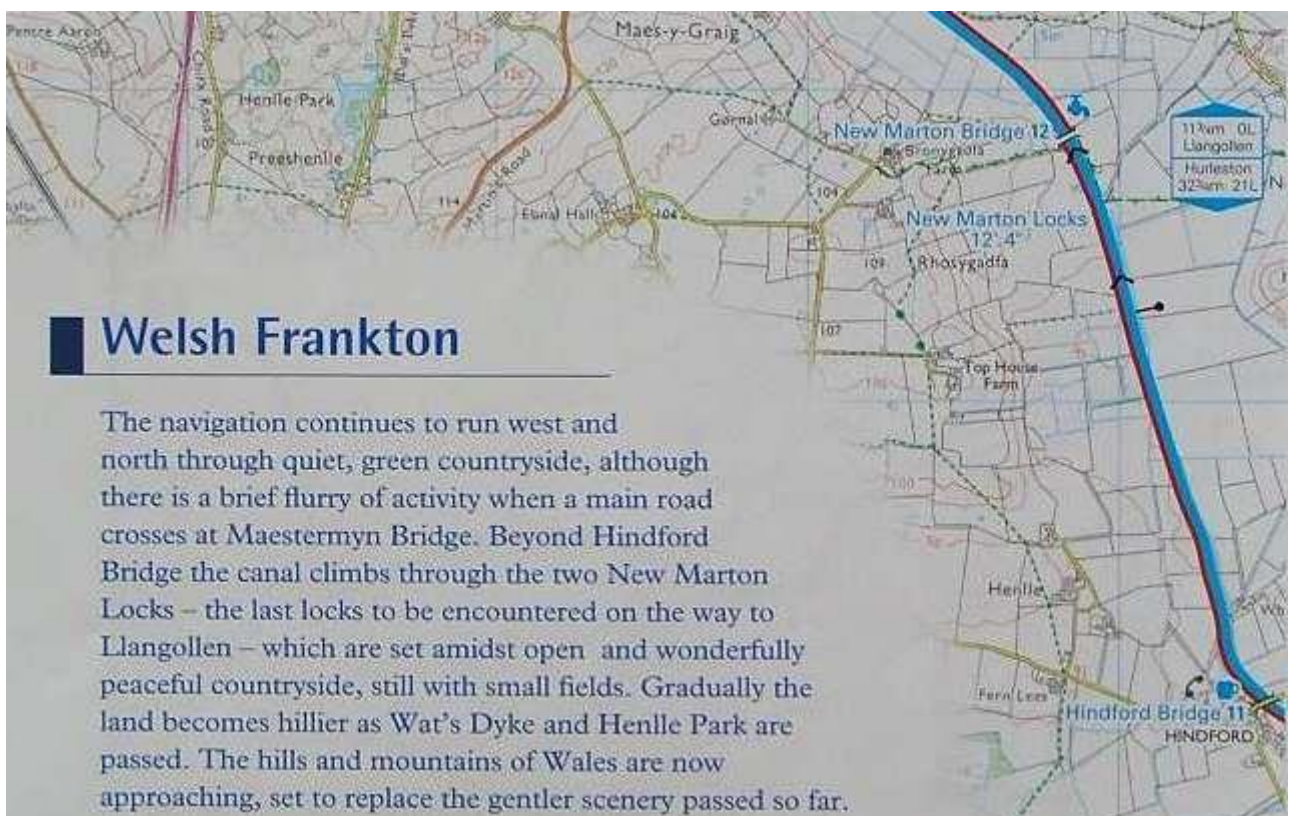


ナローボート巡航記（運河の旅）No. 6

(21/Sept/2007)

クルーズ四日目（2006年9月5日・火曜日）

さて、今日からは昨日までと違い、下の地図のコメントの通りかなり変化のある運河の旅になります。これから運河の終点 **Llangollen** に至る二日間こそ、この運河のハイライト。山あり、谷あり、ロック、跳ね橋、トンネルあり、そして、極めつけは大規模な水道橋があること。数多いイギリスの運河の中でもここが常に人気投票で十位以内にランクされる所以です。



右下隅に **Hindford** という綴りとジョッキ(or マグカップ?) と電話のマークがありますが、これが昨日の停泊地、そしてまたもや夕食をまたは晩酌を取り損ねたパブの場所です。今日はここから出発。

今日の進行方向は下(南)から上(北)へ、又は右(東)から左(西)へ、です。

走り出してすぐ、最初の虫ピン・マークのすぐ先に黒のかぎ型マークが二つあります、これがいままで何回もしつこく言ってきたロックです。

ロックが続けて二つあるということは、このあたりはすでに水路を迂回させるだ

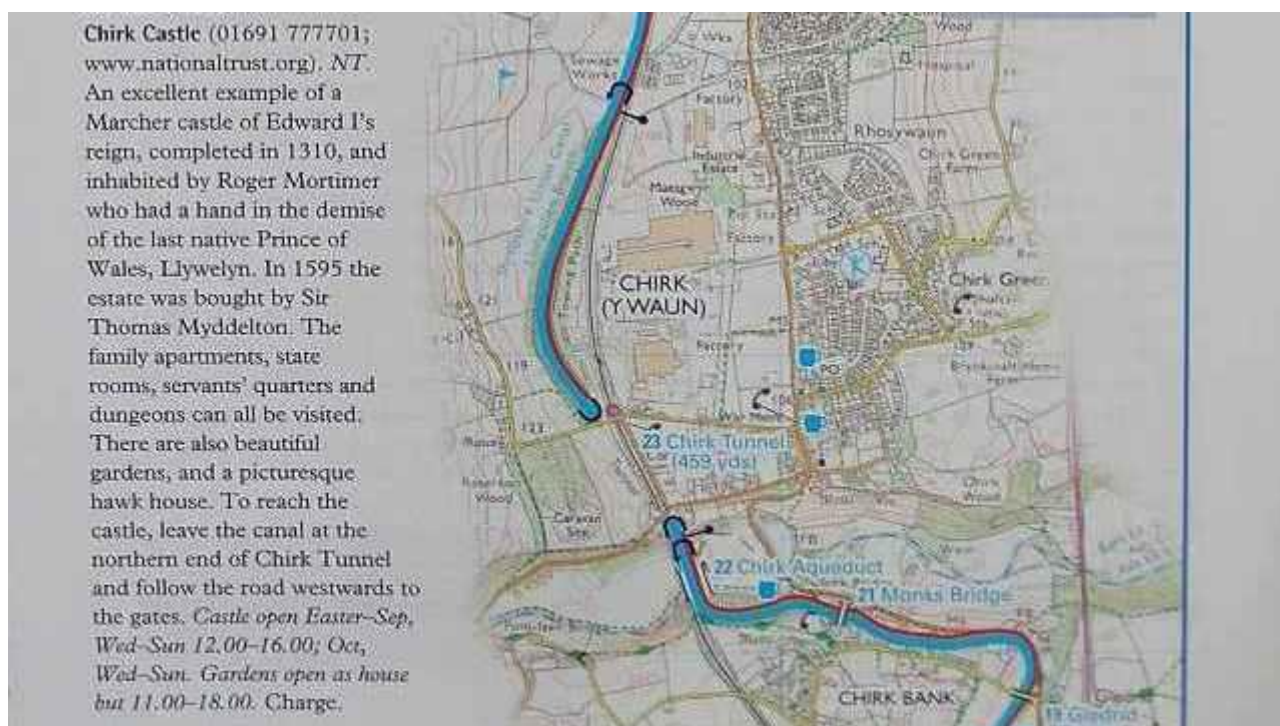
けでは解決できないほど土地の高低差がある、ということです。 ロックのさらに先の右側の蛇口マークは、給水ステーションですが、私たちは昨日ヤードで補水は済ませたばかり、だからこれは用無し。

ここのロックは二つとも一番シンプルな一段ロックです。

ロック通過に関してはもうこれまでにさんざんお話ししましたから、そろそろミミタコですね、ここでは端折って先に進みます。

さて、いよいよ本日最初のスペクタクル、アクエダクト(aqueduct=水道橋)です。下の地図をご覧ください。

中央のやや下に 23 Chirk Tunnel(459 yds)、更にその下に 22 Chirk Aqueductと書かれているのが読み取れるでしょうか？ そしてそのすぐ下の、運河がほぼ直角に曲がっている部分で、そのさらに下の方から運河の西(左)側に合流するように上がってくるごく細い黒線があるのが分かるでしょうか？



実はこの黒線は鉄道なんですけど、水道橋のすぐ南で運河の西(左)岸に並行し始めて、運河の水道橋と隣り合わせの鉄道橋で谷間をわたり、すぐトンネルに入り、

トンネルを抜けたところでは運河の東(右)側に出ています。運河のトンネルと鉄道のトンネルは地中で交差してるんですね。

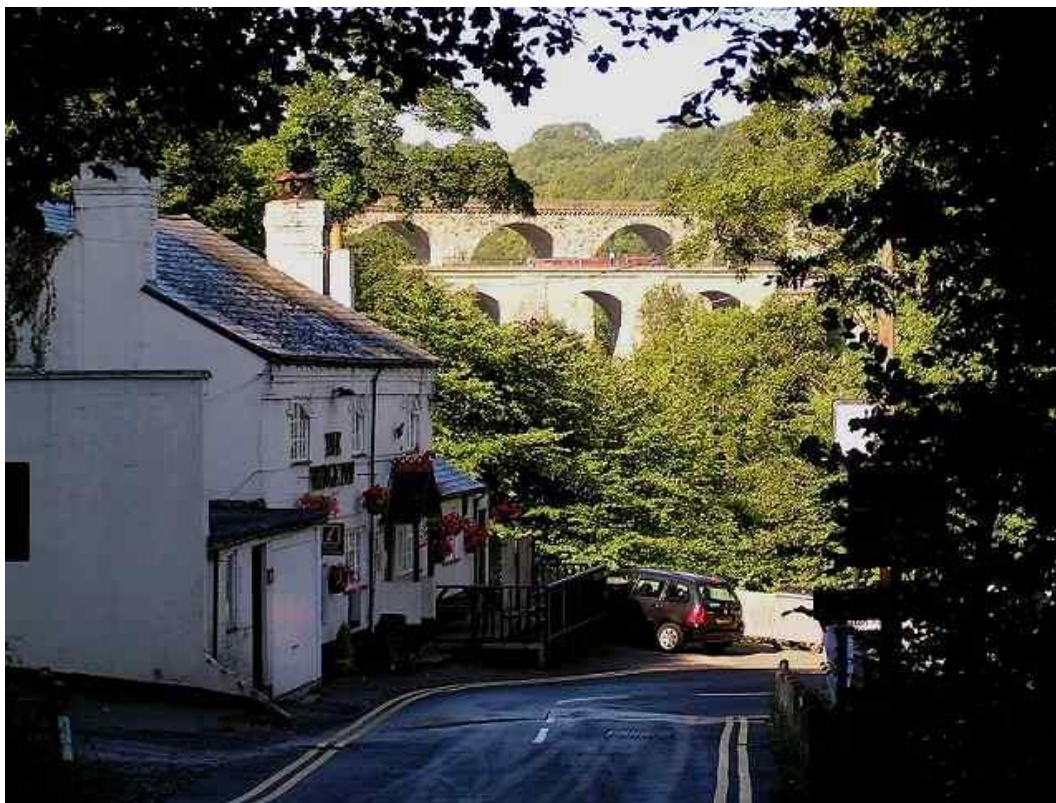
次の写真はその水道橋と鉄道橋が並行している所を南東から北西に向けて撮ったものです。この水路幅はナローボートが一隻やっと通れるだけ。

左手の連続アーチの高い橋が鉄道橋です。

これまで水道橋、水道橋と言ってきましたが、これはローマ時代の水道橋のような生活用水のためのものではなく、あくまでそこに船を通すためのものですから「水路橋」と呼ぶ方が橋の目的にかなうのかも知れません。英和で **aqueduct** を引くと、水道橋と共に水路橋という訳語が出ている辞書もあります。



水路の突き当たりに黒くアーチ型が見えてるでしょう？ これが Chirk Tunnel の入口です。この二つ並んだ橋を下から見たところが次の写真です。



この写真を撮った場所は谷間の底への下り坂の途中で、橋脚が立っている地面まではまだ大分下がります。向こう側の高い方が鉄道橋、手前が水路橋ですが、運河にエンジ色のナローボートがいるのがわかりますか？

その部分をズーム・アップすると・・・。



このボートは画面の左から右へ移動しています。こんな風に船首が上がって船尾が下がった状態を *trim by the stern* と言いますが、浅い運河を走る時はなるべくこの程度を小さくしておくのが得策です。その方が浅い所で底を、特にプロペラや舵回りを、擦る恐れが小さくなるから。

このボートは多分船首にある水タンクが空に近くなっているのでしょう。私たちのボートは昨日満タンにしたばかりだからボートの姿勢はこれより水平に近い。

ボートが完全に水平の状態は *even keel* と言います。海事用語です。

さて、アクエダクトを渡り終えると、すぐトンネルに入ります。



このトンネルは長さ459ヤード=約420メートルです。幅はやはりボートが一隻通るのにぎりぎりです。ということは必然的に一方通行になります。

でも、信号なんかないんです。その代りボートの前部にはライトがついているので、進入前にまずこれを点灯します。トンネルの中は照明が一切なく真っ暗にしてありますから、ライトを点灯したボートが反対側から来れば分かるわけ。

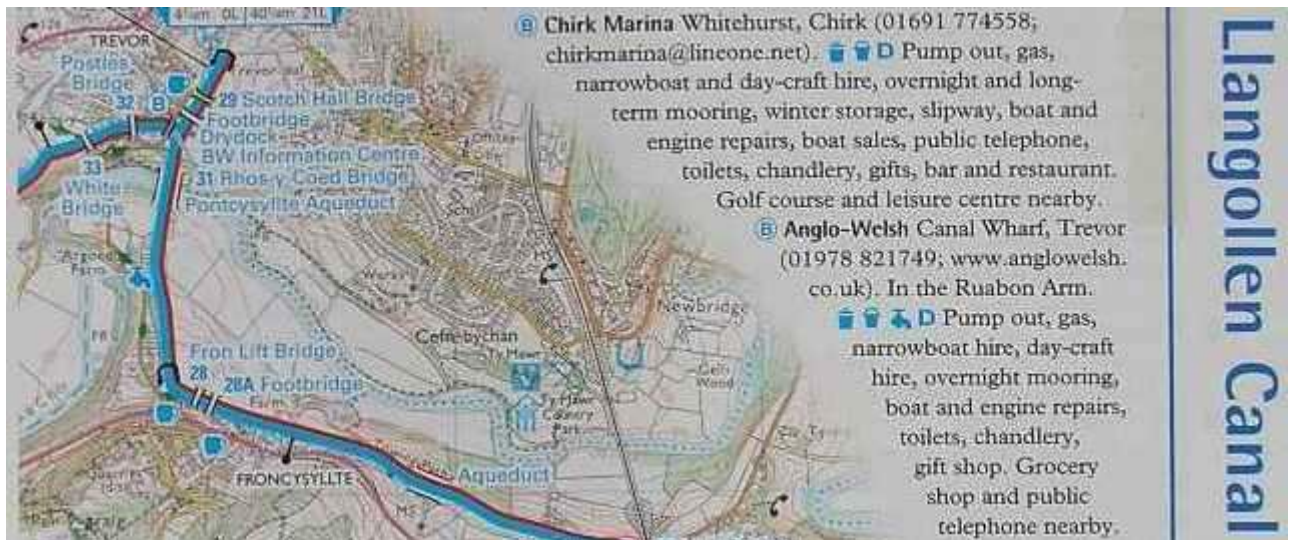
相手がライトのスイッチを入れるのを忘れてらどうなるか？ 向こうから進入したことが確認できませんね、でも大丈夫、トンネル内には照明がないんだから自分の目も利かなくなる、だから、点灯を忘れることはないわけです。

では、もし途中で球でもきれたら？ 、それでも大丈夫。トンネルの中は真っ暗だから、入口から見ると真っ暗な中に出口のアーチが明るく見えますが、トンネルの中に無灯のボートがいればそのアーチ型が完全な形に見えない。だからそれと分かります。うまく考えてますね。

このライト、確かに前照灯ではありますが車のヘッドライトのロービーム程の明るさありません。スモールよりはややましな程度。だから420mのトンネル内ではボート前部の周りがぼんやり見えるだけ、閉所恐怖症の人にはちょっとした刺激かも知れません。

トンネルはまっすぐでない、先の見通しができませんが、その点は抜かりありません、入口から反対側の出口までまっすぐで、完全に見通せます。水路橋を渡りきった所からトンネルの入口迄の間は広いスペース（ベイスン）になっていて、ここで反対からくるボートをやり過ごすようになっています。水路橋もトンネルも一方通行ですから混み合うときは大変でしょうね。

今日は既にロックを二つ通過、アクエダクトも渡った、トンネルもくぐった、次は？ 跳ね橋。下の地図の左下にブルー・ジョッキが二つ並んでいて、そばに28 Fron Lift Bridge というのがありますね。これがそいつです。



橋が二つ、手前が28番のリフト・ブリッジ。向こう側のは28A Footbridgeです。この写真は私たちの進行方向の逆に向けて撮ったもので、ボートは私たちのものではありません。イギリス人らしいカップルが乗っていました。このように一人が下りて、橋をはね上げてボートを通し、また橋をおろしてからボートに戻ります。

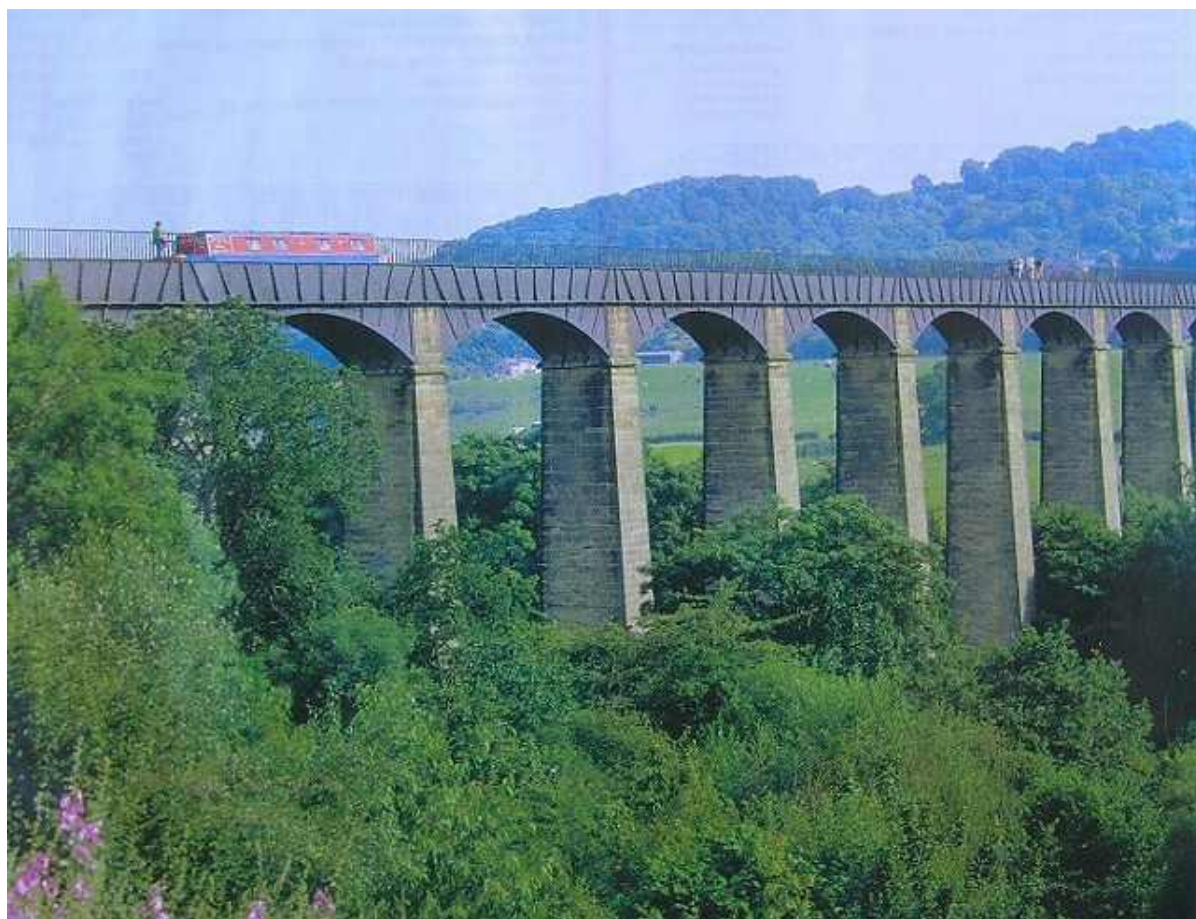
向こう側の28Aは名前の通り歩道橋です。石の階段が付いてるでしょう？

手前の跳ね橋は小さくても自動車が渡れる橋、だから階段を付けて高さをかせぐわけにはいかず、しかもボートを通すためには跳ね上げるしかないわけです。橋の上の白く太い天秤状の横棒の一番左端にロープかチェーンがついています。橋を跳ね上げるには、これにぶら下がるようにして下方に引けばよろしい。大きな人なら一人でもOK、この際、腕力やカサより「重量」がモノを言います。

ここでもう一度上の地図に戻ってください。28番の橋を過ぎて運河は右に大きく曲ります。給水所のマークを過ぎてすぐ、図の左上に青色の31の数字があるのは分かりますね。その周りに六行の青の文字列があります。

一番下の行がちょっと読みづらいでしょうが Pontcysyllte Aqueduct、これこそが今日のハイライト、イギリスの運河で一番人気の水路橋です。さっき通った Chirk Aqueduct は谷間と言っても川のなないわば窪地をまたいだのですが、ここでは下を谷川が流れています。

まずは、その外観・・・。



さっきのより一段と高いという感じがするでしょう？ 長さ1000フィート、

最大高さは120フィートだそうですから、メートルでは約305と37という数字になります。 大げさにいえばボートに乗って空を飛ぶ感じです。



Pontcysyllte Aqueduct を行く私たちのボート。この発音は聞かないで下さい、私もどうしてもうまく言えないんです。 これに比べれば Llangollen なんてメジャーじゃない。ここも当然一方通行です、進入する前に前方をよく確かめて・・・。



ボートが浮いている水面のはるか下にもう一つの水面が、という不思議。高所恐怖症の人は下を覗かないほうがいいかも・・・。

さて、スペクタクル盛りだくさんの一日も終わり、そろそろ今夜の停泊地探しです。前の地図の左上隅のこれまた盲腸線のドンづまり、 Trevor というところが今日のネグラ。 アクエダクトを渡り切るとすぐTの字型交差点があり、左へ曲がると Llangollen 方面、直進すると盲腸の Trevor です。



左は水路用の道標、右は一般道路用。右側の道路標識をよく見て下さい。上の二行は英語とウェールズ語でそれぞれトレバー・ベイスンです。これは単語の順序は反対だけどそれぞれの綴りは近く、問題なく分かりますね。では下の二行は？
上は当然英語でアクエダクト、では下は？

マークと英語綴りを見る限り、アクエダクトのことを言っているのは間違いないですが、Pont Cario Dwr の三語でアクエダクトなのか、もし Dwr がウェールズ語のアクエダクトの省略形ならば Pont Cario は Pontcysyllte のウェールズ語綴りということになります。

じゃあ、今までウェールズ語だと思っていた Pontcysyllte は英語綴りだったのかあ、それにしちゃややこしい綴りですねー。発音もウェールズ語の方がしやすいとは信じがたい。これ反対じゃないのかなー。



そして、ここが盲腸線ドンづまりのトレバー・ベイスン。この日は都合よくすいていてボートを舳う場所も選択の余地がありました。橋番号29が見えるでしょう。地図で確認して見て下さい。その名も **Scotch Hall Bridge** なにやらしい名前じゃないですか。うれしいことに地図にも青ジョッキが示されていて、この橋を右に渡ったところにパブがあり、今度こそ、そこで晩酌・夕食にありつきました。メデタシ。味のほどは？まあ、言わぬが花。何しろここはイギリス。

では、この続きはまた今度。
